

夏の終わりに
—余暇文化を考える—

開倫塾
塾長 林 明夫

1. はじめに「亭主元気で留守番がいい」を考える

- ①「亭主元気で留守番がいい」が現代主婦の本音であると、先月号の「みにむ」で書かせて頂いたら、面白いからもっと説明するようにと、多くの方々から言われた。ありがたいことなので、少し詳しく述べさせて頂く。
- ② 4月から受講している上智大学公開学習センターの研究コース（経済学部長・田中利見教授担当）「カルチャー・マーケティング」の1学期の最後の演習で、「余暇文化」について、7月4日に発表のチャンスを与えられた。発表の準備の中で出会ったのが、「余暇開発センター」が毎年出している「レジャー白書」。その最新版に「現代主婦の本音」として、「亭主元気で留守番がいい」というキャッチコピーがあった。
- ③「J・ウォーク」というグループのコンサートに、中野サンプラザへ行った。聴衆はほとんどが25歳くらいから55歳くらいの女性で、演奏が始まると立ち上がり、音楽に合わせて手拍子をとったり、踊ったりしている。座っているのは、男性ばかりだ。「ライブに行って、みんな乗っているのに、連れてきてあげた男性が椅子に座っているんじゃあ、白けてしまうので、あの男性たちは二度と連れてきてもらえないよ」と、近くの女性が言っていた。
- ④隣の席には、高校1年生と思われる女性が、その母親と思われる女性と来ていた。娘はコンサートが始まるまで、数学の公式を理解した上、簡単な問題練習をしていた。演奏が始まると母親とともに立ち上がり、音楽に合わせて踊っていた。おそらく母親は一人で来るよりは誰かと来たかった、しかし亭主を連れてきても乗りがよくなって面白くないので、試験前だけでも高1の娘を連れてきたに違いないと思った。
- ⑤女性は5の倍数の年齢を迎えるごとに人生を真剣に考える。「20歳の台に乗る前に」「25歳だから」と、30、35、40、45、50、55、60、65、70、75、80、85、90、95と、100歳、いや105歳、110歳と5の倍数の年齢を迎えるごとに自らの人生を真剣に考える。「私のこれまでの人生は何だったのだろうか」「このままでいいのだろうか」「これからどうしたらいいのだろうか」と考え、「本当の自分を発見して自分らしく生きよう」と具体的な行動を起こす。「心も身体もいつまでも若々しく生きよう」と、様々な具体的努力をコツコツと「継続」する。
- ⑥平日の夜、地下鉄に乗っていて、ある時ハッと気付いたことがある。1日の仕事に疲れているのは同じなのに、男性は週刊誌や夕刊紙、マンガを読み1日の疲れを癒している人が多く、女

性は文庫本、ハードカバーの本、ワープロで作られた書類に目を通しての人が多かった。

⑦なぜ、「亭主元気で留守番がいい」が、「現代主婦の本音」となったのか。答えは簡単で、亭主と一緒にどこかに出かけても、趣味の深さや一つの分野における知的レベル、感受性レベルが余りにもかけ離れていて、女性にとっては面白くも何ともないからだ。「一人で放っておいてもらいたい」「静かに家で待っていてもらいたい」「できればその日だけでもいいから、子どもの世話や家事一切をやっておいてもらいたい」が本音となる。

⑧では、世の亭主族はどうしたらよいか。パートナーと一緒に時間を過ごしたかったら、彼女の水準に近づくよう努力するか、一緒にいても迷惑にならない、つまり嫌がられない行動様式をマスターするのも一つの考え。「我が道を行く」と、自分も自分自身を発見し、やりたいことを事情の許す範囲で行うのも一つの考え。

⑨相手の生き方を自分の生き方同様に認め合い、互いに尊重し合って、仲良く暮らすことが一番。

2. 夏の終わりに「花火大会」を考える

①以前はお金がかかりすぎて、よほどゆとりのある街でしかできなかった「花火大会」も、景気が悪いとはいえ、世界の黒字国を続けている日本では、多くの街でも行われるようになった。「花火大会」好きの人は、この「みにむ」のような情報誌を片手に、今週の週末は〇〇、来週は△△と、いくつかの花火大会に出かけ、見比べるようになる。そうすると、見る目がこえ、同じ「花火大会」でも相当に違い、タダで見せてもらって言いにくいハナシだが、「うまい、へた」がわかるようになる。

②同じ1万発をあげるのなら、90分よりは60分に集中した方が、はるかに迫力がある。感動また感動で、拍手が鳴りやまない花火大会もあれば、拍手はパラパラという花火大会も多い。一体この花火大会はどのような組み合わせで何分やるのが最も感動的かを考えることも大切かと思う。長時間かかる理由が、一つ一つの花火の説明なら、その要否も考えた方がよいかもしれない。

③先ほどの田中先生のお教えによれば、「花火大会」にはクラシック音楽がよく合うという。イギリスのある地エディンバラの花火大会では、オーケストラを用意して、その演奏に合わせて花火を上げるそうだ。「花火に合う音楽」とは何かを考えるのも面白いのではないか。

④「仕掛け花火」の「あげ方」や「間隔」にも相当いろいろな花火大会で「差」つまり「うまい」「へた」があるようだ。演出を根本から考えなおすことも大事。

⑤見る側にも相当差がある。観客が何万人も出ているのに、ゴミがほとんど見られない花火大会も多い。見れば、手にポリ袋を持ち、自分で出したゴミばかりでなく、目の前に落ちている小さなゴミも拾っている。花火大会翌日の何千人ものボランティアの方々の早朝からの会場周辺

の清掃の御努力を思えば、どうにか見る人のマナーを上げる創意工夫を今以上に必要がある。

⑥花火の見方について私に一つ提案がある。花火は音だけ耳で聴いても十分楽しい。数多くの商店やレストランは花火大会の夜も、お客様のことを思って店を開けて下さっている。花火を時間から時間まで首を上げて見るのも楽しいが、花火の音を聴きながら、お店で買い物をしたり、レストランやいろいろな飲食店で食事やアルコールを楽しむことも人生の喜び、生きていてよかった、明日からのエネルギーとなることも多い。店の人も、花火の日には腕にヨリをかけてよい品ぞろえをしたり、おいしいごちそうや飲み物を準備して下さっていると思うので、「花火を見ながら、買い物や食事、アルコールに親しむことを花火の日のライフスタイルの一つ」にすることをすすめてほしい。花火の音を聴きながらの食事など最高の贅沢だと思う。

⑦「花火大会」もそうだが「夏祭り」も運営する方々は大変なご苦労だと思う。ボランティア活動の極地の一つが「祭の運営」であるとさえ思う。運営にあたって下さっている何千、何万人ものボランティアの皆様のお陰で、みんなの思い出に残る楽しい夏を過ごせるのだと思う。そのことを承知で申し上げるのだが、そうは言っても同じ花火大会や祭りでも、同じエネルギーを使うのなら、まだまだ創意工夫がいくらでもできそうな場面が多い。そこで一つ提案だが、「夏の終り」に記憶の新鮮な9月と10月の2ヵ月かけて、来年の「花火大会」や「夏祭り」をどうするかを、徹底的に討論し、同じエネルギーで少しでも本年と比べ創意工夫にあふれた参加する人の喜ぶ、この街ならではの内容を追い求めたらどうか。「去年よりは今年、今年よりは来年」と、花火大会や夏祭りであろうと、少しでも「進歩」が具体的にみられると、参加する人も張り合いがあり、連帯感も生まれる。この街に来てよかったと思う人も増える。

3. おわりに

①足利工業大学に総合研究センターが7月から発足した。大学を地域に開き、大学と地域社会の関係を今まで以上によくしようという試みで、大いに尊敬に値する。折角、足利工業大学で門戸を地域に広く開いて下さったのだから、足利市のみならず、この「みにむ」をお読みの両毛地区の市民の皆様も積極的に足利工業大学に通われることをすすめる。様々な公開講座が準備されていると同時に共同研究も可能だ。勉強会をやりたければ、理系のみならず文系の先生も講師としてお世話下さるようだ。余り知られてはいないが、足利工業大学の図書館も登録し許可をもらえば利用できるようだ。

元気な方は、正式な聴講生になったり、社会人として入学試験を受けて大学生や大学院生になり、正式に勉強なさることをすすめる。一度社会に出て、何年間か仕事をして初めて勉強することの大切さがよく判る。仕事をしながら、又、家事をしながら勉強をすることをすすめる。

よく理解して頂いて「亭主」に留守番をしてもらい、大学や大学院で奥さんが勉強することなどは素晴らしい光景だ。

②足利工業大学に限らず、両毛地域の各大学や短大、専門学校でも同様の取り組みをしたり、し

はじめているところが多い。一度社会に出てから、専門学校、短大、大学や大学院のような高等教育機関を出たり入ったりして、一生を過ごすのがこれからの生き方の一つであると思う。テーマさえしっかりしていれば、今から努力すれば専門学校や短大、大学や大学院の先生にだっていくらでもなれる。いつまでも生徒や学生でいる必要もない。一つのテーマのもとで研究し、論文を書き続けていけば、必ず高等教育機関の先生になれる。(実際、これから十数年で大学院の学生は約2倍になるので、実務を経験した大学院の先生が圧倒的に不足する。チャンスはいくらでもある。どうか、がんばって頂きたい。)

③次に、効果の上がる英語の勉強方法を二つ紹介する。

一つは朝7時から7時20分の20分間、NHK教育テレビの英語番組を、テキストを買い求め見続けること。中学程度から上級まであるので自分に合ったレベルの番組をいくつか選び、とにかく見続けること。ビデオに録り2～3回繰り返し見ること。音だけテープに録音し、自動車に乗りながら何回も聴くこともよい勉強になる。

④もう一つは、もし高校1年位の英語力があると思ったら、もっと言えば中学や高校のとき英語が少しでも好きだと思ったら、自宅で英字新聞をとるとよい。難しくて話しにならない、と考えないで次のようにやって下さい。まず、日本語の新聞を読むことが大事。特に政治、経済、国際、社会欄を日本語でよく読むこと。次に、日本語の新聞と同じ社で出している英字新聞をじっとガマンして1面から1時間辞書を引かず読み続けること。日本語の新聞を1時間じっくり読み、同系列の英字新聞を1面から1時間ガマンをして読み続けることを1年間継続するだけで、あなたの英語力は飛躍的に向上する。とりわけ、聴き取り能力が向上する。読める内容は大体は聴き取れるからだ。速く読む能力ももちろん向上する。「こんにちは、さようなら」などという挨拶の会話レベルではない、複雑なことを話す力や、まとまりのあることを書く力も、英字新聞を1日1時間365日読み続けることにより身につくことが多い。

栃木県内で、「英文読売」の購読者は何故か500名少ししかいない。英語の先生で英字新聞を読まない人もいる。宝物があるのに、それに近づかないのは本当にもったいない。

⑤来春4月に統一地方選挙が行われる。それらに立候補をなさることを予定している方々に一言。先日の参院選を見るまでもなく、現代の有権者は非常に厳しい選択眼をもっている。有権者に難しいことなど言ってもわかるはずはない、と思っているのは、古い選挙しか知らない人。連呼と握手位では投票しない。現代の有権者は、新聞や雑誌を丹念に読み、テレビやラジオをはじめ、様々な形で日本の実情や政治の実態をとらえている。1000万人以上が海外を毎年旅して国際感覚を身につけている。そこで、立候補予定者自らの政策をどのような形で具体的に示すかについて、詳細にまとめ発表しつづけることをこれから半年間お続け下さることを希望する。どんなに難しい内容でも、必ず有権者は理解する。どうか遠慮なく正々堂々と自らの所信を表明して、有権者の心をとらえ代表となって頂きたい。